
お姫様な俺様

時雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お姫様な俺様

【Nコード】

N6703A

【作者名】

時雨月

【あらすじ】

朝起きたら何だこれ！？誰よりも目立ちたい、でも誰よりも地味、そんな中学生姫宮優。そんな現実にも憂れう彼に起きた突然の変化…、金髪碧眼チビツ娘になった彼の苦悩たっぷり(?)な生活の始まり始まり

プロローグ 姫様御乱心（前書き）

この小説はフィクションです、作中の人物、地名、団体は実際のものと全く関係ありません、全部作者の妄想です。

プロローグ 姫様御乱心

男なら少なくとも一度は、大勢の好奇心な注目を一身に浴びてみたいと思うだろう？

例えばサッカーをしているときなら、華麗なシュートを決めて皆の視線を独り占めだ。野球なら、力強いホームランで見るもの全員を啞然とさせられる。何もスポーツだけじゃない、勉強も然りだ。テストで学年１位なら学校中に自分の存在を知らしめることが可能だ。…何、平凡が一番じゃないかだって？この臆病者が！

俺は特別になりたい、どっかの五人組が

「ナンバーワンにならなくても」

なんて歌ってるが、そんなの凡人の言い訳だ。俺はカリスマ性が欲しかった、突飛な頭脳が欲しかった、誰もを超越する強靱かつしなやかな肉体が欲しかった。

…しかし神は俺を凡人として生を下さりやがった。中肉中背、学力は中の中、顔は…いつ見てもぱっとしないな。スポーツでは、どんなに練習しても体格の良い奴が得を見るものだ、大人になりかけの体に勝てるわけない。勉強も、こんな不純な動機じゃあ長続きできるわけがなく、世に言うガリ勉君に遅れを取ってしまう。顔は…放っておいてくれ！

しかし神は俺を見捨てはしなかった、最大のチャンスを与えてくれたのだ。それは嬉しい。うん、物凄く嬉しい…、だけど！

「こんなの反則だぁー！…ケホケホ！？」

天の神に届き給えと、虚空に叫ぶ細い喉は、耐えられずにむせ返ってしまった。

俺こと姫宮優の、あまりに唐突で、あまりに情けない第二の人生の幕開けだった。

ブログ 姫様御乱心（後書き）

某漫画を読んで思いつきました、やっぱり恥ずいな／＼／＼まあお暇でしたらお読みください！

えびそーど1 姫様御生誕

あなたの願いを叶えてあげましょう

…は？いきなり何コイツ…。願いつて、お前は7つの龍の宝石から出たシエンンか？

…もう一度言います、あなたの願いは何ですか。

冗談の通じない奴だな、さてはこれは夢か。おお！夢を夢と自覚できたの久しぶりだな。そうか、どうせ夢なら夢の中だけでも注目されたいなあ…、例えば全くの別人になるとか。でもただハンサムになるんじゃ女の子にモテても、男にはひがまれるしなあ。皆に注目されたいな。

やはりそうですか、期待した通りです

は？何言ってるんだお前、おいちよっと

ジリリリリリリリリリリ！！！！

…うるさい。

無粋な目覚まし時計の音で目が覚めてしまった。くそう折角夢判断できたっていうのに…。悔しいからこの目覚ましには永久に音を鳴らし続けてもらおうか？

ジリリリリリリリリリリ！！！！

…ああうるさい、だめだ、この目覚ましに対するささやかな復讐なんだ、ここで止めてしまつては元も子もない。

ジリリリリリリリリリリ！！！！

復讐だ…報復だ…。

ジリリリン！

「何を馬鹿なことやってるんだ俺…。」

結局目覚ましの罵倒に耐えられず、起床を余儀なくされてしまった。次はこうはならないからな、覚えてろ、目覚まし時計！

ベッドから抜け出して伸びをする。あれ？目覚めは最悪で頭は痛いのに、体はやけに軽いな。最近疲れてたから、昨日は早めに寝たおかげだろうか。うんそうだろう、そうに違いない。そのまま俺は、寝惚け眼のまま制服に着替えていく。…あれ、何だか着ずらい、凄く着ずらい。しっかり袖を通しているのに手が袖から出てこない。それにズボンも丈が長すぎるし、ベルトをぎゅうぎゅうにしても拳2個分くらい余る。学ランって伸びる材質だっけ？んなアホな。仕方なく袖と裾を折り曲げ、去年使ってたベルトで一番キツク絞る。…こんな格好で学校に行くのか？

二階の自室から降り、朝食が用意されているテーブルの前に座る。朝はやっぱ和食だよな。白い飯、味噌汁、焼き魚、漬物、生卵、完璧なまでの献立だ。ありがとう太陽、ありがとう大地、ありがとう母さん。命と労力をありがとう。

「いただきます…っと、おはよう母さん。俺の制服新しくしたの？」洗濯物を干しに出ていたのであるう、籠を持ってパタパタと現れた。ごく普通の当たり前な挨拶と素朴な質問に、ごく普通の返事を期待しながら卵を割る。

「…あなた、どこの子？」
ベチャツ。卵が目標地点、茶碗のご飯中心部から大きく外れてテーブルに落ちてしまった。…え、母さんってこんなに冗談がキツかったっけ？

「おいおいおい、息子の顔を忘れてしまったのですか？朝のジョークにしては突飛すぎるって」

「…え、優？ホントにあなた優なの？」
何を言ってるんだろうか？俺の顔を本気で忘れてしまったのだろうか、まったく卵がもったいな…、ん？なんだこの卵白にうつすらと写る俺の顔は…？見覚えが無いぞ…？

「っちょ、ちよつと待ってて！」

俺は椅子から飛び降りて、飛び降りて？そっいえば座るときもよじ登ってたような…。あのときは寝惚けてたからわからなかったのか

？アホの子ですか俺、いや誰の子ですか俺！？わけがわからなくなりながら洗面台の前に立ち、鏡を覗こうとするが、

「なんで届かないんだ！？」

無様にぴよんぴよんと飛び跳ねるが、洗面台は嘲笑うかのように高くそびえている。無駄だとわかりながら挑戦を続けていると、後ろから母さんが俺の脇あたりを手に乗せて、抱き上げてしまった。

「これで見れる？」

そんなガキみたいなことを…、ん、なんだこの娘？膝までゆったりとウェーブしながら流れ落ちていく金髪に、小柄でスツと整った顔立ち、どこまでも透き通りそうな碧色の眼、触れればすぐ折れてしまいそうな腕、のちっさい女の子が、鏡の中で母さんに抱き上げられている。抱き上げられてる？まさか…、

「この娘…、俺えーーーーーっ！！！」

えびそーど1 姫様御生誕（後書き）

評価に値するかわかりませんが、お読み頂いて感激です。

えびそーど2 姫様御来訪

ひとまず俺は、子供のときに着ていた टीーシャツ と ハーフパンツ を身につけていた。下着は…、戦隊ものの絵がプリントされている パンツ だ…。何で残しているの母さん？今は母さんと向かい合って ペタン と 女の子 座りをしている。アグラをかこうとしたら、

「めっ！」

つて足を叩かれてしまった。…え、しつけられてる！？

「確かに、あなたは間違いなく優だわ…」 そりゃそうだ、まぎれもなくこの心は俺の心で、誰の物でもない。姫宮家の長男、姫宮優だ。ただ体がなぜか置いてきぼりだ。

こんなちっこくて、幼稚な体でいなければならないなんて…。

しかしもう一度じっくり見て見ると自分の鈍感さに呆れてしまう。

髪の毛は以前の短髪とは打って違って、上品さを保った、染めた跡のない綺麗なウェーブの金髪で、触れれば汚れてしまいそうな白くて弾力のある素肌、声変わりし始めて粗暴になりつつあった声色は口調は別にして、あどけなさを残した少女のそれである。年齢的には、10歳程度だろうか。指摘される前に異変に気づけよ俺。

「昨日の晩見たときは男の体だったけど、朝起きたらその体だったのね」

そうだと思う、もしかしたらベッドの中で目覚ましと格闘しているときにはすでにチビッ娘体型だったのか？それにしても母さんはよく正気でいられる。普通、息子が変形したら取り乱すだろうに。だが母さんはそんなことには動転せずにこうして

「可愛い……………っ 私こっという女の子が欲しかったの…」

……………！！！！

訂正、母さんは馬鹿親ナンバーワンに殿堂入りです。おめでとう母さんぴーぴーぴー…、あ、いや、ちよっと抱

きつくなつて、寄るな寄るな、

「頬をすりすりするなあー！ー！」

必死の抵抗はなかなか通じず、2分間くらい玩具にされた。

「…さて、行きましようか。」へ？行きましようつて、まさか…、
「学校に行くの！？いや不味いつて！」

「あらどうして？一度、先生方に説明したほうがいいわ。」
そ、それもそうだ。このまま学校に行つても誰も俺だと気づかないし、「お嬢ちゃん勝手に入ってきちゃだめだよ」って門前払いされかねない。それに今日は確か1時間目は担任のシマムー先生も空いてるはずだ。シマムー先生こと嶋村榮花先生は、親しみやすいお茶目な若い先生だ。きつと俺のことが誰だか、話せばわかつてくれるはず。

「それじゃあ学校に電話して、支度をするから優も準備してね。」
そう言つて母さんは部屋を出て行つた。…さて、準備って言つてもなあ。一応制服をカバンに詰める。…トイレに行きたくなつちまつた。…！？そうだ、これからは方法が違ふ…。

「考えるな考えるな…。」

呪文のように頭で何度も詠唱し、目的の場所へと向かつた。
…ふう。

さて、行きますかつと。俺と母さんは車に乗り込み、出発した。俺の住むこの町、藤岩町は、大きく分けて3つに区分される。南は広域に渡つて住宅地で、隣県の会社に勤める人たちのベッドタウンだ。北西は駅があることもあつて微妙に発達しており、この市の商店街になつてゐる。本屋に立ち寄つたり、スーパーに行くにもここへ来ることになる。また、学校帰りの生徒の寄りエリアになつていたりする。北東には手を付けられていない林が広がり、そこにポツンと市立藤岩中学校が建つてゐる。

なぜこの林だけ手を付けられていないのかというと、これ以上木を伐採すると、雨が降った際にそのまま雨水が川に流れ込んで、川が氾濫してしまうそう。だから学校以外は建築しないよう市から声がかかっているらしい。住宅地と商店街、学校のある林は大きな川で隔たっており、北と東から流れる川が合流して、西へ流れていく地形になっている。

鉄橋で住宅地と商店街は繋がれており、学校へ行く人はそこから商店街と学校を結ぶ橋を渡って登校する。住宅地から学校に直で行ける橋を作ってくれば近いのに、市では全く考えてくれない。…まあ都会でもなく田舎でもない平凡な町だ。今は登校時間には遅い時間だから、通りには道行くサラリーマンぐらいしか見えない…はずだった。

「あ…、歩美だ。」

幼稚園のときから、どういうわけかずっと同じクラスで、今も2-1で一緒のクラスの幼馴染だ。歩美は何をやるにしても、トロイっていうか天然っていうか…、あれでよくイジメられないものだと昔は思ったが、多分人柄のせいなんだろう、誰に対しても優しく接するから、友人も多い。そんな彼女は今、一生懸命に通学路を走っている。…寝坊だな、間違いない。母さんは車を歩美の近くに寄せてウインドウを空けた。

「ハーン、おはよう歩美ちゃん！」

歩美とは親ぐるみの付き合いだから、母さんも歩美とは仲が良い。でもハーンって…。

「あ…、おはよう…、ごさい…、ます…。優くんのお母さん…、はあ…、はあ…。」

「ちょっと、学校まで走っていったら疲れちゃうって。乗ってきなよ！」多分そうなるだろうと予測していた、歩美はありがとごさいますと言いなから後部座席に乗り込んできた。…いやちょっと待て、車に乗られたら…。

「あれ？そちらの外国人の女の子はどちら様ですか？」

歩美は不思議そうな顔をして質問してきた。当然だ、この町に外国人なんて滅多に来るわけないし、それが車に乗ってたらなおさら気になる。どうしよう…何とか誤魔化さないと。

「ああコイツ、優ちゃんよ。」

母様いきなりカミングアウトですかぁー！？

「ノーノーノー、アイアムノットユウチャン。アイアム…」

「なに馬鹿言ってるのよ、学校行ったら皆に説明するんだからいいじゃない。」

ぐむ、ごもつとも。歩美にだって、どうせ学校でバレるんだ、それがちよつと早まっただけに過ぎない。

「…ふう、そうだ。俺は優だ、多分いきなり言われたって信じられないだろうけど…」

「えっ…、優君って、ホントは外国人の女の子だったの？」

一つ飛び越えた！。俺の真の姿がチビツ娘なのか聞いているよ、俺が優なのかどうかという問題は関係無しだよ。

「なわけあるか、昨日までの俺が本当の俺だったの。今は…、何でこうなったんだかわからない。」

本当になんでこんなことになったんだ？宇宙人の仕業か？わけわからん。

「えっと…、お人形さんみたいですっごく可愛いよ。」
それを言うな。

「でしょでしょう？私もこんな女の子が欲しかったから嬉しくて嬉しくて。ねえ優、ずっとこのままでない？」

勘弁してよ…。

さすが車だと早い、いつもなら三十分くらい歩く道を、ほんの五分で走破してしまった。

「またあとでね、優くん。待ってるよ。」

ああまたな、と返事をし、俺は母さんと職員室へと向かった。今は朝のホームルームの時間だから、きっとシマムー先生もクラスにいるのだろう。

「先に校長先生と話をしてるから、あなたはここで待ってて。」
そう言つて母さんは職員室へと入っていく。

.....

..... 暇だ、校長に話はうまく伝わってるのだろうか？俺が入ったほうがいいんじゃないか？百聞は一見にしかずとも言つし。でもいきなり入ったら混乱させちゃうかな？あれこれ決めかねているうちに、見知った奴が昇降口から入ってきた。珍しいな、アイツが遅刻するなんて。

「重役出勤だな、福島。」

福島慶太。この学校の生徒会長で吹奏楽部の部長、同じクラスで同じ部活だ。ちなみに歩美も同じ部活だ。表向き真面目を通して猫をかぶっているから皆の人望は厚い。が、地が出ると色んな意味で豹変してしまう危険な奴だ。でも根はいい奴で、いつもは気さくだから話しやすい。だから今も何気なく挨拶してやった。：しまった。

「：え？な、なぜ俺の名を：いやそれより、外人のお子様が俺に声を掛けている？これは夢か幻か！？」

自分の状況をすっかり忘れていた、見た目小学生のパツ金娘が、いきなりフランクリーに話しかけちゃ不審に思うだろう。しかもまずい事に、相手はあの危険極まりない福島だ。：身の危険を感じてきた、しょうがない、信じてもらえるかどうかかわからないが試してみるか。

「そりゃわかるさ、クラスメートで同じ部活だもん。俺は姫宮だよ。」

「え、姫宮！？だつてお前：？え？昨日部活で会つただろ！？・・・ええ！？」

良かった、普通の反応だ。いきなりそれが貴様の真の姿か？なんて

聞かれたら堪ったものじゃない。

「こんな格好じゃあ信じて言っても信じてもらえないだろうけど、でも本当なんだ。試しに何か質問してみよう。」

「ん……じゃあ担任の先生は？」

「シマムー先生、嶋村榮花だろ。もっと難しいの聞いてみるよ。」

「今度の文化祭で姫宮が提案した曲は？」

「冷静大陸だ」

博士次郎がバイオリンをつとめる、かなり有名な曲だ。きっと文化祭で演奏すればウケがいいと思って推したのだ。

「この前俺が姫宮だけに言った言葉は？」

……こいつの信念であり、追い求める夢であり、存在理由だ。

「ロリッ娘にブルマおろスク水、是究極にして至高の存在也」

これだけで福島のこととは説明できるだろう、つまりはこういう奴だ。

「むむ、一句一言違えず述べるとは……貴様は正に姫宮優本人だな。」

まったく……でもまあ危惧した状況が起きる前に理解してもらえてよか

「最高だ、これこそ究極！心は健康な男子、身体は金髪碧眼の幼女、まさに至こはああ！？」

予想以上のリアクションありがとう、この背丈から繰り出すパンチは、きつと君の大事な宝箱に直撃していることだろう。さっさと撃沈してる、どうせ元々遅刻してるんだし。

そうこうしているうちに、母さんからお呼びがかかった。じきにシマムー先生も来ることだろう。……やれやれ、今度は2人相手に自己紹介か、先は長いな。

えびそーど3 姫様御紹介

「はいみんな注目！」

言わなくなつて、みんな俺に注目してるよシマムー。

「今日はみんなにお知らせがあります。この度、姫宮優くんはご覧の通り女の子になってしまいました。」

それは言われてもわかんないだろうよシマムー。

ほら、みんな怪訝な顔して何やらひそひそ話してるよ…。

ざわざわ。

「え…、あの子ホントに姫宮くん？」

「嘘だあ、姫宮君の影も形もないじゃない。」

「あいつどこの国のお嬢様だ？」「身なりからして中学生じゃねえよ。」「でも姫宮君は今日欠席だし。」「風邪か何かだろ？」「またシマムーがトチ狂ったんじゃないの？」……………。

えっと、なんだか話を切り出しにくいぞ…。

つてか仮にも先生を本人の前で狂人扱いするなよ。

ああ、切り出しにくいな。

「みんな！！何を愚かなことを言っている！！そこにいるのは我等がクラスメイト、姫宮優本人だろ！！」

福島！お前こいつうときに限って頼りになるや

「何しろ彼、いや彼女は俺と等しき夢を語り合った同士であり、そして俺のために自らその究極かつ至高の姿を体現した奇跡の口ふぐおああ！？」

「誰がてめえのためにこんな格好になつてやるか!!」

我慢できなくて放ったチヨークが見事に刺さった。
俺を勝手に同士にするな!

ざわざわ。

「口……?」

「たっ確かに姫宮ならあんな感じでツツコミしかねないな……。」
「もしかしたらあの子、ホントに姫宮くん?」
「それより福島大丈夫か……?」
「……………」

むむ、良くも悪くも俺のことわかってくれたみたいだな。
福島、貴様の犠牲は無駄にしないぞ。

「えー、何だか知らないけど、気づいたらこんな格好になつてしまいました……。多分このまんまかもしれないけど、みんなには迷惑をかけることもあるかもしれないけど、そこはひとつよろしくです。えっとそれと……」

ここで不覚にも間をとってしまった、
うわぁ、みんな俺に注目してシーンとしてるよ、何か言わなきゃ……。

「えっと……、かつ可愛いとか、あんまり言つなよな……。」

馬鹿か俺!?

いくら思いつかなかったからってこんなこと言うか!?

すまん福島、お前の犠牲は無駄にな

「素晴らしい!!これぞまさに伝説上の生き物とされている天然ツンデレ少女ぐほああ!!?」

我慢できなくて放った黒板消しが見事に脳天にクリーンヒットした。
お前は少しくたばつてろ福島!

…っは！？これではまた場の空気が…

「…姫宮君可愛い…」

……は？今どこからか聞こえたような…。

わいわいがやがや！

「姫宮君照れてるー、可愛いー！！」

「ちっちゃーい、抱かせてー！！」

「その金髪かわいすぎー！！」

「ツンデレチビツ娘きたこれー！」「姫ちゃんこっち向いてー、
キャー！ーッ！！」

「ツンデレ姫っ！！」

「姫ちゃーん！！」

おいおい！？みんな福島が悪癖が感染してませんか？

何だよツンデレ姫って！？苗字でもじるなよ！

…でも、姫ちゃんか。気分いいかも。っは！？いけない！このまま
では着々と男としての尊厳を失ってしまう！

…ってかシマムーさつきからニコニコしてなんですかみんなこっち
に来ないで頼すりすりはもうやめて

「抱っこしてぎゅううう、とかするなー！ー！！」

それから俺のあだ名は

「姫」

になっちゃった。

えびそーど3 姫様御紹介（後書き）

評価コメントが、同じような感じになってしまいました…。すみません…次から気をつけます…。

えびそーど4 姫様御授業

「大丈夫かな… 姫ちゃん。」

隣の席から歩美にひっそり話しかけられた。…姫ちゃんって強調するなよ。

歩美の身長は他と比べて低いから最前列の席だ。

…無論俺がダントツでチビだから、俺も最前列なわけだが。

「痛たたた…、みんないきなり玩具扱いしやがって！」

「あはは。でも今の優くんすっごく可愛いよ、後でその髪触らせてね。」

むう、だから可愛いとか言うなって…。

あのあと数学の先生が廊下で待っているのにシママーが気づいて、早々にみんなを席に戻してくれた。

今は数学の時間だ。

…眠いよう、数学に限らず授業中の先生の説明って子守唄みたいだ。

「このように x の二乗と x 、定数に展開されている式を上手く変形することで因数分解に持っていけるんだ。さてこの教科書の練習問題13を、今日は五月二日だから… 姫宮！お前が前に出てこれを解け。」

ふざけんなおっさん。

姫宮ってどう考えても出席番号は中くらいか後半の数だろ！

実際俺の出席番号は25番だ。

いったい五月二日と俺の出席番号に何の関係があるってんだ。

「5の二乗は25だ。」

さいですか。

…くそつ、めんどいなあ…。

「ごめん話してて説明聞いてなかったね。優くんわかるかな…？」
教科書の問題だろ？しかも練習問題だ。こんなの説明聞いてなかったってフィーリングでスラッと解けるさ。

「まあ見てろつて。」

「わ…、優くん格好良可愛い…。」
どんな形容だ。

「えつと、 x の二乗に $5x$ 、プラス6か…、2と3だな。」
方針を立てていざ書き込んでいく…う。

「…先生」

ぴょん。

「どうした？こんなのもわからないのか、見た目と同じの頭脳なのか君は？」

「いえそうじゃなくつて…」

ぴょんぴょん。

「書いてある問題が高くて…」

ぴょんぴょんぴょん。

「届きません…。」

教室が爆笑で溢れた。薄情者どもめ、ばかやろー！！

…無様だ。

「やっぱり格好悪可愛いかったね、優くん。」

お前は可愛いという単語を付けたいだけだろう。

みんなと一緒に笑いやがってコンチキショウ。

すっげー恥ずかしかったぞ。

…やっぱり数学って眠りの呪文だよ、先生はラ、ホー使いか？

…だめだ、耐えられん。

「歩美、俺は寝るぞ。非常時以外は起こさないでくれ。」

「わ…、だめだよ優くん。授業は真面目に聞かなきゃ…。」

歩美のそんな囁きを耳にしながら、俺は既に深いまどろみに身を任せていた。

そこは草原の波であつた。

風は火照つた俺の体をゆっくり撫で、時をゆっくり押し流す。

目を上げれば、空は雲よりも何よりも高く、果てしなく澄んだ青。

そこで俺は一人だつた。

何だろう、この悲しい気持ち。

何だろう、この切ない感覚。

そこで俺は一人ではなくなつた。

誰かいるの…？

人影が見える、声は幼くあどけない。

人影も声に遜色なく小さい。

膝から下が、草の丈のせいで見えなくらいだ。

お前、どうしてそんなボヤけて見えるんだ？

君は、ここに一人でいたの？

人影は俺に話しかけている。

わからない、いやわかつてる。

頭の中で答えを既に知つてた気がする。

何だこの既視感、でも確かに初めてな光景。

知らない、いや知っている。

じゃあさ、友達になる！君は何て呼べばいい？

……くん……うくん。……ゆうくん。

……うるさい、自覚まし時計め、ついに仲間を呼んで復讐に来やがったな。

だが俺は負けないぞ、返り討ちだ。貴様らが数で攻めてこようと、俺は五分で片付けられるぜ。

……いや無理か、ずっと鳴らさせるんだし、でもそれぐらい楽勝なんだ。俺は負けない！

「起立！」……あ、しっしまった！俺は反射的に起き上がるが、周りを見ると……、クラス中みんなが俺を見てクスクス笑ってる……。

数学の教師は、いつの間にか国語の教師に変わっていて、やはり俺を見ている。

「礼！」

福島の手令で礼をし、がたがたと座る。っし、心臓がまだバクバク言ってるよ。

「緊急時だから起こそうとしたのに……」

「何で数学の後の休み時間で起こさないんだよ……。」

俺はひそひそと歩美に不平を漏らす。

こんなギリギリで起こそうとするから良い晒し者じゃないか。

「だって、数学が終わった後の手令で起こそうとしたのに、優くん
ぜんぜん起きないんだもん……。休み時間だって起こそうとしたのに、
ピクリともしなくて……。」

さいですか。

なるほど、俺は手令も、休み時間の喧騒も物ともせず昏々と眠り続

けていたのか…。

でもピクリとも動かないって…、無呼吸症候群！？

「おい姫宮、何だその髪は。」

ビックリして前を向くと、国語教師が俺の前に立ち止まり、ジロリと見下ろしていた。

あ…、そういえばコイツ、生活指導だったっけ。

ってか先生にとって俺に対する注目点は髪だけですか。

もつと別に聞きたいことあるんじゃないの？

…数学では何も聞かれなかったな、男性教員は順応性があるのか？

「地毛ですよ、気づいたらこんな髪で…」

「ふざけるな！そうだとしても、校則では黒にしろと書いてあるんだぞ、何故黒く染めてこない！？それに制服はどうした！？」

無茶言っなよっさん。

この格好になったのは今日なんだぞ、染めてる暇なんてあるか。それに学ランだってブカブカなんだ、そうすぐに用意できるか。

「とにかくその髪をなんとかしなきゃな！来い、職員室で染めてやる！」

「いやちよつと待って、聞いてくれって…、痛！？」

いつ痛たたたたた！？おっさん待てって、髪引つ張んなよ！

「ちよつと待ったあ先生！！」

危うく教室のドアまで来たところで、福島のカビが教室に響いた。

…コイツで大丈夫かなあ？些か不安だぞ、前例が前例だけに。

「何だ福島？貴様、生徒会長のくせにこの違反者を庇うつもりか？」

「先生、それは誤解じゃありませんか？生徒手帳には服装・髪型

に関する規定で、『元の髪の色を変色させることを禁じる』と書かれていて、脱色も禁止されていますが、姫宮のその金髪は紛れもなく地毛です。先生、『そうだとすると』って前提を認めていますよねえ？」

そっそうなのか福島？だとしたらこのおっさんの早トチリ…、
「いや！こいつの金髪をこのままにしておけば、いずれ他の女子も真似をするに違いない。悪い芽は早目に摘まなきゃならん！」
何い！？つまり俺は皆に対する見せしめか！？
「なるほどなるほど、あつはつは。でも先生は偽者の毛を頭に乘せていますよねえ？」

場の空気が凍り付いた。

…は？偽者の髪…、まさか！？

「っそ、それは関係なかるう！？…いや、元々私はヅラなんて」
「先生、ヅラなんて一言も言っていないですよ？あ、もしかして先生はカツラをお被りになられているのでしょうか？あつはつは、いやこれは失敬！まさか皆の風紀を正す先生が、自分を偽ってカツラをお被りになっているとは思わなかったのですねえ。」

「ちっ違う！私はヅラなど被ってなんか…」

「（イブシロン）！！（クサイ）！！」

何を言ってるんだ福島？

福島は急にコードネームのような物を叫び出した。…うわ！？
誰だこいつら！？顔を黒いマスクで隠した学ラン二人組みが降ってきた。

そいつらは先生に走って近づくと、何かを奪って教室から走り去ってしまった。

…あ。

わいわいがやがや！「うわ！？マジで禿げてやがる！」「完全バーコードだ！読み取れるんじゃないの！？」「ヤベー、超ウケル！」

教室中が「ハゲ」だの「カツラ」だのといった言葉で溢れていた。先生は真正銘のバーコードハゲであった。

いや待て待て、さっきのあの黒い二人組みは誰だよ、授業サボって天井で何してんだ！？

…いけね、先生頭真っ赤にして怒っちまったよ。

「福島あ！！貴様、先生に向かって何ていうことを…」

「物騒なカラスですねえ先生、いきなり教室に入ってきて先生を襲うなんて。ねえみんな！！」

わいわいがやがや！「そうだなあ！危ねえカラスだ！」「歩美ちゃん駄目じゃない、窓を空けてちや危ない鳥が入ってきてカツラを盗んじゃうでしょ！」「あれ？カラスじゃなくて生徒！」「まったくねえイケ好かねえカラスだ！」

空気を読めていない一人を除いて、みんなはカラスだと連呼してる。みんな…俺のためにこんな…。涙出てきそう。

…ひい！？先生、顔の色が赤を通り越して真っ青ですって！

「そんなわけあるか！貴様こんなことをしでかしてどうなるか…」

「先生。こんなところ、父兄に見られたらどうなっちゃいますかね

え…？（デルタ）！！」

パチンツ！！

今度は福島が指をキザっぽく鳴らすと、部屋が真っ暗になり…、出たカラス！！

カラスこと謎の学生は小型のプロジェクターのようなものを取り出

し、スクリーンに何かを映し出している。

…俺が先生に髪を引つ張られてるところだ。

ただ場所はここではない。

…なんで小学校の正門の前なんだ？

「まッ待て待て！？こんな合成写真、信用されるわけな…」

「でも先生、髪を引つ張っていたのはここに居る皆が証言してくれますよ？…おわかりですよね先生？」

「きよっ今日は自習だ、各自好きな科目の勉強をしていなさい！ひ
いいいいいい！！」

そして先生は、悲鳴のような声を残しながら頭を隠して逃げ去って
いった。

お、部屋も明るくなった。カラスは、窓から飛び降りる最中であつ
た。…ここ4階だぞ？

と、とにかくすげえよ福島！何だかよくわからなかったけど助かつ
た、たまには役に立つん

「大丈夫ですかー！ー！ー！？我が愛しの幼き姫よー！ー！ー！
はあはあ、あの汚らしい手から君を逃すためならたとえこの身を
滅ぼしてでも君を救つぶべっ！！？どうぐはあああ！ー！ー！」

「誰がテメエの姫だ！？ってかお前は姫ってよぶんじゃねえー！ー！」

さっきまでの格好良さの欠片も残っていない、醜い姿となつて近づ
いてきた福島に、思わずローキックで足元を崩して顔に怒りの鉄拳
を食らわせた。

あんた、さっきまでの勇姿が台無しだよ。

「や…、やったなあこいつ…。俺は君のツンなら、甘んじて受け
入れるぞ…。」

おまえはマゾか 危険人物め。
しかも小学校で何してやがった。

その後三日間、先生は学校に来ることができず有給を使って引き籠もってたという噂だ。

この事件は後に、

「カラスとカツラ事件」

として長く語り継がれたらしい。

福島にカラス部隊（先の出来事で命名されてしまった）のことを聞いてみたんだが、適当にはぐらかされてしまった。

まああいつが指揮官みたいなものなんだろうなってことはわかるが、恐るべしカラス部隊の仕事の速さというべきか…、ん？

カラスを使って小学校に忍び込ませたのでは…？

…考えないようにしよう。

えびそーど4 姫様御授業（後書き）

大学のネットサーバが使えなくなつて、ずっと投稿できませんでした…。遅くなつて申し訳ない！！初めてのの方は、読んで下さり感謝感謝です

えびそーど5 姫様御披露目

「助けてもらったのに、貴様に対して感謝の気持ちが微塵も起きないぞ。」

「ふははは、姫のそのツンツンな台詞こそが、俺の糧になるのだ！」
馬鹿は懲りずにまだこんなこと言ってる。

「あははは、わ…、殴っちゃだめだよ優くん。」

俺と福島と歩美は、いつものように放課後の帰宅路を歩いていた。
訂正、あの馬鹿を追いかけて走っていた。

「はあ…、はあ…。ところで姫宮、昨日ついに発売したアレ、買ったぞ。」また何か、俺を嵌めるようと陽動に出やがった。

…ん？昨日が発売日のアレ…、あ。
まさか！？

「『溶けた血』のP 2版か！？」

「ふ…、さすが我が同士。話がわかるではないか。」
だから同士って呼ぶんじゃねえ、この犯罪者予備軍。
だが、『溶けた血』なら話は別…。

「何…？その、『溶けた血』って…。」

ん、そうか。一般人の歩美にはこれがどれだけ素晴らしい作品かわからないだろうなあ…、よし。

説明しよう！！

…やっぱやめた、面倒臭い。

「要するに格闘ゲームだよ、すぐく有名なゲームを題材にした。パソコン版のが最初なんだが、これやっていると時間を忘れるほど楽し

「いんだよ。」

気づいたら朝日が昇るのを見ていたことが何度あったことやら…。

「でも、パソコン版があるなら、また新しく買わなくてもいいんじゃないの？」

「それがぜんぜんよくないのだよ歩美くーん！！」うわ、いきなり大声で割り込んできやがって…。

「このゲームはだな、元の『溶けた血』のゲームクオリティはそのままだに、キャラの強さのバランスを再調整、さらに新キャラ、新技、新要素を加えた、進化した超ハイクオリティかつ燃えくな格ゲーなのだよ！しかも初回限定版には猫アルぶげあああ！！？」

「それ以上はテメエが嬉しいことだろー！！」

あと、一秒、殴るのが遅かったら大変だったじゃねえか犯罪者め。

「う…、うつ…。カバンで顔を殴るのは反則でございますぞ姫様。」
「テメエ相手にルールなんて適用されると思ったか、ってか姫様」
「はやめれ。」

「でだ、今日は金曜であるからな、明日も明後日も休みだ、いくらでも遊べるぞ。今日はとことんいつてみようではないか！」

むう、これはとても魅力的な誘いだ。だが、

「お前のその話振りからすると、今日は俺の家に泊まる気か？」
「その通りです姫！何しろ数学の時間の寝顔は最高だったしなあ、明日の朝、無防備に寝ている姫のホッペにツンツンぶるげはあああ！！？舌が、舌がー！！！」

「マジで気色悪いんだよお前はー！！！！」
ジャンプを利用したアッパーが見事に顎に刺さった、ザマミロ。今日でコイツを家に泊めるのは終わりだ、何されるかわかったもんじやない。

「福島君可愛そうだよ優くん…。でも、今日は優くんのお家で遊ぶ

んでしょ？私も行っていかな？」

「おー、来い来い。二人きりはシャレにならない。」

「ゲーム持ってきて姫様のお宅に参りますぞー！ー！！では後程、サラバ！！」

福島はやかましく叫ぶといつもの別れ道で猛烈ダッシュを始めて突っ走っていた。

…不死身か、アイツは。

さて、二つの橋も渡り終え、住宅街に入り、我が家ももうすぐだ。歩美は、

「家戻るの面倒だからそのまま優くん家に行くよ」

とのことで、いつもの別れる曲がり角を二人同じ方向に曲がった。

……着いた。あれ、車がある。

母さん家にいるのかな？

……！！！！？

「歩美……」

「ん、どうしたの優くん。お家に入らないの？」

「いや…、何か物凄く嫌な予感がするんだ。」

そう、この玄関のドアを開けた瞬間、底知れぬ不気味な何かが、俺の身を危険に晒す。

俺の脳がそのように俺に警鐘を鳴らしているんだ。

「気にしすぎだよ、早くいこ。」

歩美は俺の気も知れず、家に入ることを促す。

ホントに気のせいかな？杞憂ならいいが…。

俺はドアノブに手を伸ばし、扉を開けた。

「ただい」

「おかえり、優！今日は早いわねー、あら、歩美ちゃんもいらっしやい！」

なんで速攻で出てくるんだ母よ、張ってたのか？

「さあ優、新しい服を色々買ったから全部腕を通してみなさい！ああ、今から楽しみね！」

予感大的中。

おい歩美、にやにや笑ってるんじゃない、薄情者。

「な…、勝手にそんなこと…、てか服なんて小さいときのを着れば」「あんなガサツなもの今の優には着せられないわよー、ほら早く！あ、下着も買ったからね。」

最悪だ。

そして俺の部屋には大量の『女の子用』の服が置かれていた。息子の不幸に上じて何やってんだ馬鹿親め。

…あれ？

「制服まで女用なの!？」

そう、服の山の一部に、わが中学の女生徒用制服、つまりセーラー服とスカートが置いてあるのだった。

「一応は聞いてみたんだけど、あなたの身長に合いそうな学ランは無いんだって。あっても買わなかったけど。」

おう、待て。

仕方ない、来週もＴシャツハーフパンツで登校するわけにもいかな
いし、着てみるか。

「着方わからなかったら着せようかあ？」

「あ、私も優ちゃんに着せたいなあ。」

わなわな。

二人の手が不気味な動きをしている。

部屋から出てっくれ。

下着も換えるだと、何だこのふわふわした布切れは!?...う、肌
に密着してるようで気味が悪い...
スカートかあ...、男がこんなを着るなんてみっともねえなあ...股
がスースーして頼りない感じだな。
そんでセーラーを着てスカーフをする...と。あれ?スカーフなんて
どうやってつけるんだろう?

「困っているようだな、俺がお手伝ぎに、やー!？」

「なんでおまえがいるんだよー、ってか入ってくるんじゃない、福島！！」

突然ドアから現われた変態に、俺の戦友目覚まし時計を投げ付けてやった。

「ふ…、ふふ…、偶然ドアを開けてみたらヒロインがお着替え中。お決まりな状況だ！」

意図的にタイミング見計らって入っておきながら何を言う。どうやら俺が着替えてる間に来てたらしい。

「優くん、スカーフ巻いてあげるからはいっていいかな？」

歩美が控えめな声でドアの向こうから呼んでいる。まあ歩美ならいいかな。

「おう、頼むよ歩美。」

「じゃあ失礼しますっと。…優くん……、凄すぎ。」
何がだ。

「ほら、端を持ってこう折り曲げながら中に入れて…。」

「面倒だなあ、やっぱ学ランのほうがよかったなあ。楽だし。」

「絶対ダメ、今の優くんすっごく可愛いんだから、学校みんなも驚くよ。」

そうか、そうだった。これからしばらくの間はこの醜態を晒さねば

ならないのだった。

「着替えおわったんで入っていいですよー。」

歩美のオーケイサインが出た瞬間、待つてましたと言わんばかりにドアがバンツと勢い良く開き、福島が侵入し、母さんも後ろから入ってきた。

「すげえー！ー！！生の美少女学生だ！！カッカメラ！！」
マテコラ。

「あらあら、予想を遥かに上回る可愛さね。あつ、あとで焼き増してね福島君。」
「アンタもですか母さん。」

「ほら優、鏡で見てみなさいよ。」
母さんから渡された鏡の中には、頬を微かに紅潮させて、青と白の卸したてのセーラーに身を包み、汚れ一つない白い足が長めのスカートから覗く、小柄な少女がいた。しかも金髪の色がセーラーと、日本人の黒よりずっと色合いが取れている。自分で自分に見とれてしまった。
「はっ！？」

「何考えてんだ俺！ー！！！」

母さん、俺はどんどん道を外れてる気がします。なのにどうして福島と一緒に興奮してるんですか？

「じゃ、次の服いくわよ。小さすぎる服は返さなきゃならないから。」

「どうやらこの服の山全部、着なきゃ解放されないらしい。」

.....。

「優……くん……、それ……」

イウナ、イワナイデ歩美。

「冗談で買ってみたんだけど、ここまで似合ってるなんてねえ。」
ナンテモノヲカッテキタ母サン。

「うおー……！！生プリ ユアブラッぐえあ！！？」

テメエの反応が一番腹が立つ福島！

俺は次の服だと騙されて、コスプレをさせられていた。それも、全国のおつきいお兄さん方の間で大人気の、あのアニメである。

「ほら、例のポーズをとってくれ姫宮！」

ちよーありえなーい。

その後、やたらフリルのついた服やらピンク色のヒラヒラした服やら、やけに丈の長かったり短かったりするスカートやら……兎角色々を着せられた。

中にはメイド服まであったが、さすがにアレで警戒していたので、これを着ることは全力で抵抗した。母さんの見立てが良かったのか、そのどれもが良好なサイズであった。三人は、俺の姿が変わるたびに感嘆の声を上げ、俺の仕草すべてに興奮していた。さながらファッションショーのモデルの気分であるが、嬉しくもなんともない。本当なんだからな。

「ふう……、姫のニューコスチュームは全部見たし、もう夕飯の時間だから、俺は帰らせてもらっぞ。」

そういえばもう夕方であった。あれ？今日ってゲームするつもりで来たんじゃない？いつの間にか趣旨替えされてたようだ。

「じゃあ私も帰るね、バイバイ優くん。」

「さらば姫宮！」

俺がバイバイと返事すると二人は部屋から去っていった。母さんも夕飯の支度するからと、一階に下りていき。俺は一人部屋に残された。今はＴシャツにスパッツの格好である。

…少しだけ気に入った服が、一つだけあった。もう一度着てみようかな、…着てみよう。

それは真っ白なワンピースであった。首の辺りから、膝くらいのスカート部分の裾までボタンが十個付いていて、全く汚れの無い、綺麗な純白であった。

鏡の中で、あどけない少女が天使の姿で、顕現していた。…こそばゆいな。でも…、何か…、懐かしいような

「悪い姫宮！『溶けた血』置き忘れちゃ…、た…？」

世界からこの部屋だけが取り残された気分だった。いきなり現れた福島と俺は、石像のように固まった。…と思ったのは俺だけだった。福島はポケットからカメラを抜き出し、フィルムを巻き、シャッターを切る。その動作を、ガンマンの抜き打ちのように一刹那でやった。

「その調子だ。」

福島は満足したように、ゲームのパッケージを取って部屋を出ていった。爽やかな笑顔とともに。

鏡の中で顔を真っ赤にさせた少女を、俺は頭の片隅で可愛いなと思
っていた…。

えぴそーど5 姫様御披露目（後書き）

長い間更新が滞って申し訳ありませんでした…。

えびそーど6 姫様御運動

「なぜ来なかった、姫ー！ー！！」

朝起きたら侵入者。

わからない、コイツが今俺の枕元で怒鳴り散らしている理由が。

…二日連続徹夜で『溶けた血』やってたんだ、学校に行くまでまだ時間あるし、もう少し寝かせる。

「朝起こしにくるのが、幼なじみのお約束だろうがー！！」

吐き気がする、そのシチュエーションは。それに、俺とお前とは中学からの付き合いだろ、勝手に関係を捻じ曲げるな。こっちはツッコむ気力もないんだよ。

「ちなみに今、朝の八時半だぞ」

助けてください。助けてください！！

「おはよう、優く…うわ、目の下すごいクマだよ」

俺は不承不承、福島（ふりがなは『へんたい』）と並んで走り、朝のホームルームに滑り込んだ。休止モードの体を強制的に立ち上げたのだが、徹夜のダメージはやはり深刻であった。

「ゲームに熱中しすぎたらダメだよ、今日は部活もあるんだよ？」

「あー大丈夫、一時間目使って寝てればさっぱりするさ」

「残念、一時間目は体育だよ」

神は我を見捨てた。

「そうそう、シマムーがね、姫宮君は今日から女子の授業に合流してね、着替えも女子と一緒にだよ、って言ってたよ」

一瞬幻聴が聞こえた。何て言ったこの人は？ 女子と一緒に？
…
…
くは！？

この学校の体育は男女別なねで、二組合同で行われる。そして奇数組で女子、偶数組で男子がそれぞれ着替えをすることになっている。

いいのかよシマムー？ 中身は健全な男の子なんだぜ俺。いやよくないに決まってる。だからおれは体操着を持って教室を後にしようとした。しかしドアには女子が立ちはだかっていた。

「姫ちゃん行っちゃダメー！」

「あつちはケダモノの巣窟なのよ！？」

「私たち姫ちゃんになら、見られても平気だから！」 「行ったらアイツラに輪姦されちゃう！」

待て、最後のはヒドクナイカ？ でも確かに、男子の視線が煩そうだな…。でも女子と一緒に着替えだなんて…、イカンさすがにそれはでも男子にマワサレうわああああ！

結局、俺は女子トイレの個室に入っていた。

さて、アレが現在の全国の学校から廃絶したのはいつごろからだろうか？ 小学校のときでさえ、俺の学校では既に消滅していたので、福島に教えてもらうまで知らなかったくらいだ。もちろんその直後に殴ったが。中学でも当然アレは無く、ハーフパンツ着用が義務付けられていた。

しかし体操着袋の中には、ハーフパンツの代わりにブルマが入っていた。

俺は露呈される太ももをＴシャツで隠そうとしながらグラウンドに向かい、朝に母さんが言ってたことをぼんやり思い出していた。

「優に合うサイズのハーフパンツが無くて買えなかったから、代わりにブ…」

確かこの辺りで玄関のドアを閉めた気がする。有得ねえ、なんでハーフパンツが無くて、ブルマがあるんだよ！ いや文句言ったってどうにもなるまい。とか考えてる間に着いてしまった。授業が始まるまでまだ少し時間があり、みんなバラバラになって話したりダベってたりしていた。

…見つかった。誰かが俺を指差して誰かに話してるのが見える。あ、走ってこっちに来る。その数がだんだんと増えていき、二人…、五人…、十人…、これぐらい数えたあたりで、俺は逃げ出していた。

あっさり捕まって玩具にされた。

「…という理由なんで、今日はこの格好で授業を受けます」

俺は四十人近く的女子（プラス福島）に弄ばれてるところを女子担当の女体育教師に剥がされ、難を逃れていた。今はその経緯を話したところだ。

「そう…、突然環境が変わったのだし、急に別の用意をしると言われても無理だもんね。今日はそれでも構わないわ。…これから大変でしょうけど、頑張つてね」

初めて優しい言葉をかけられた気がする。

色々問題はあったが、やっと体育の授業だ。…どうせグラウンドを駆けずり回るだけだがな。夏のプールの授業に入るまでは、体育なんて我慢の時間でしかないのだ。

「優くん、寝不足なんですよ？ あんまり無理しちゃダメだよ」

隣に並んで走っていた歩美が話しかけていた。

「別に問題ないよ、むしろいつもより体が軽くて走りやすい気がするんだ。…て、実際そうか」

「でも…」

「気にしすぎだって、ほら、先に行くぞ」

体が軽くなったのは事実であり、男子の体育のランニングのとき

より楽に感じていたのも確かだった。

「あ、あれ？」

だがその分、筋肉の量も肺活量も落ちていたのだろう。それなのに急に張り切ったせいだろうか。さらに寝不足も合わさったためか。

急に体は砂袋を乗せられたように重くなり、視界がブラックアウトしながら傾くを感じていた。大きな音と衝撃があって、ぶっ倒れてる自分を発見していた。

「く！　だか　言　の　！　先生、　宮さ　倒れ　！」

…情けない。手足はだらーんと弛緩し、視界は未だ薄暗く、混濁した意識は何も考えようとしなない。

「　ら熱射　よう　、保　員！　手　て！　姫
保　室に連　行き　」

何も聞こえない。

何も理解できない。

何も感じない……。

空はいつの間にか優しい夕日の色に包まれていた。目につく全てのモノ　永遠に続きそうな草原も、遠くに見える森も、高みに見えた雲も、あの人も　暖かく燃えていた。

もう、帰らなくちゃ

なんで、まだ大丈夫だろ、もつと遊ぼうぜ？ …でも、『うん』
とは言ってくれないんだよなあ。…また知ってるよ俺。

早く帰らないと、お母さんに怒られちゃう

また、淋しさが込み上げるような気持ちだ。せつかく、やっと
会えたのに…。…？ …せつかく？ やつと？

大丈夫、また明日遊びにくるから

その言葉で、俺の心もあつたかくなつた。

甘つたるい匂いがする…。それに体が動かない。重いかそついで
う次元じゃなくて、本当に動かない。

「ん……。な!？」

「あはやつとお目覚め?」

あまりの現実感の無さに絶句した。うつすらと目蓋を開けた目の
前には保険室の女教師が、鼻がくつつきそつなほど近づいて、身じ
ろぎしようともがいた四肢はベッドにロープで縛られていた。

拉致られた!?

「あなたの体のことは、色々と聞かせてもらったわ。面白い例だか
ら、実際に調べさせてもらつたよ。うふふ…」

ヤバい、つてか下唇を軽く噛むように発音してヤヴァい。何がヤ
ヴァいかって、手がワキワキ動いてるのも不気味だし、うふふふふ

ふ……なんて延々笑い続けてるのもキショク悪いし、何より右手に異様な器具が！

……な、なんで注射器なんて！？

「はーい、ちよつとチクツとしまちゅよー」

本能という名の警鐘が頭の中でガンガン響いている。あれを刺されたら良くて昏倒、最悪

「ひぐし」

みたいに首をガリガリ掻き毟って死亡！？

やめてやめて！ そんな物騒なものの腕に近付けないで、これで色々楽しんじゃうわよじゃねえよ年増！！ ひいつ！？ ごめんなさいごめんなさい！ 刺さないで、た……

「助けてください！！」

「任せる姫ー！！！！」

神は半分投げ遣りに救ってくれるようだ。

ガシャーーン！！ というガラスが割れる効果音と共に現われたのは、もはや説明はいらぬヤツだった。

学ランの代わりに特殊部隊チックな服装を身につけ、両手には黄色と黒が螺旋を巻くロープと、何やら注射器より物騒な得物を持っていた。なぜ日本の学生がM4なんて持つてゐる！？ ってかここは一階なんだから屋上からロープアクションなんてしてないで普通に入れよ！

「ここは任せる姫、あなたは早く逃げ」

「任せたぞー、ってか二人とも助からないのがベスト!」

言われるまでもなく逃げていた。

「ふ…、で、でも…」 『いいから早く、俺も後ですぐに行く!』
『きつとだよ!』 ぐらいのやり取りは定石だろくに、不粋なものだ」

「あら、あなたも逃げていたほうが身のためではなくて? かなり
機嫌が悪いわよ私」

「抜かせ、以前から信用できない輩だと思っていたが、蛇蝎魔蝎の
類だったとはな! 貴様は会長直々に手を下してやる。 (シータ
と (ガンマ) は手を出すなよ、俺の獲物だ」

そして戦いの火蓋は切って落とされた、らしい。

全く興味は無かったし、本気で相打ちになったほうが学校のた
めになると思っていたしな。

後々わかったことだが、あの女教師は気に入った女生徒をとっ捕
まえては怪しげなことを続けていたらしい。

そのことに関しては一応福島に感謝だな…。

あ、それよりさつさとこの服着替えないと、いつまでもこんな格
好じゃあ、また誰かに取って食われちゃう。

えびそーど6 姫様御運動（後書き）

パソ使えないとすぐやりづらい……、思いついたことがパツと書けないし、「サ行の文字」を書こうとして電源ボタン連打して全部消えちゃったり……。まあ言い訳はこのへんにしないと見苦しいので……。更新遅れてごめんなさい！！！！m（――）m

えびそーど7 姫様御拔擢（前半）（前書き）

長期間放置していたことの理由を見付けようとすれば、いくらでも見つかるのですが、言った瞬間にそのどれもが言い訳になってしまいうでしょう。125日間の間、何も反応を示さなかったことを深くお詫び申し上げます。今回中途半端な分量での投稿となりますが、僕が生きてることを示す、生存確認ってことで…。

えびそーど7 姫様御拔擢（前半）

「昨日は大丈夫だった？ 体痛くない？ 優くん…」

俺が倒れた次の日の今日、朝教室に入ると真っ先に心配そうな顔をして近づいてきたのは歩美である。そういえば、あの変態保険医に襲われたときはもう下校時間を過ぎてたんだよなあ…。おかげで部活をサボってしまったじゃないか。…元を辿れば『溶けた血』にハマッて完徹してた俺も悪いけどさ。

「大丈夫大丈夫！ 別にどこも痛くないし、反省して睡眠時間をちゃんと戻したし」

「そう… 本当に良かったあ。もし優くんが今日来なかったらどうしようって心配だったんだよ？ 昨日の部活だって休んでたから、もしかしたら倒れた拍子に大怪我しちゃったんじゃないかって…」

言えない…。いつも運動部の擦り傷や風邪っぽいきな生徒の手当てをしている保険医が、実は目ばしい標的を見つけては『あんなことや『こんなこと』をしようとしてきたなんて…。

「ね…。念のために早退したんだよ。ほら、この体になってまだそんなに経ってないし、また授業中に倒れたりしたら怖いからさ」

「そうだったんだ…。もう、あんまり無理しないでよね！」

呆れたような笑顔を浮かべた歩美は、そのまま自分の席に戻っていった。…さてと。俺はアイツの席のほうを見た。表紙カバーの黒い、何やら怪しい手帳を片手にニヤニヤ笑いをしている。…気味悪

すぎる。

「朝っぱらから何企んでんだ、福島？」

聞かれた本人は何故かシャープンを取り出しながらこちらに向いた。

「おはよう子猫ちゃん。今の世の中にいるゴミ虫どもを排除して新世界を作ろうと思ってるね。まずはあの保険医から……」

お前には死神が憑いてるのか？

「冗談だよ子猫ちゃん。でもまあ、彼女は来ないはずだ、三日後には辞職するであろう」

さつきから子猫ちゃんってヤメ……え？

「彼女って……あの保険医のことか！？ お前あのあと何があったんだよ？」

「なあに、最後に勝つのは、知力・体力・組織力に秀でた者だってことだよ」

自分の髪を指ですくうように、サラッと言ってのけていた。恐ろしすぎる……この生徒会って、先生一人を消すのも楽にできてしまうのか……。

「不可能じゃないが簡単じゃないぞ？ でも、姫の身に害を成した女豹には、それ相応に罰を受けてもらわねば気が済まないからな！
ああ~~~~~！！無事で良かった、ひめさ」

お、予鈴だ。

俺はささっと自分の席に着席した。

国語の授業。

「えつと、そ・・・それじゃあこのページの3行目から音読を・・・」
姫宮さん如何でしょうか？」

腰低いな先生、そんなにあのカラス事件のことが頭から離れないのか？ 髪の毛は有無を言わず離れたのに。

「どうやら姫はそのような気分では無いようだ、無礼だぞ、下がれ！」

どの面下げて言つてやがる福島。

「わっわかりました・・・失礼しました姫宮様・・・」

プライドの欠片も無いな先生、南無。

「今日はちゃんと部活に出れるよね、優くん？」

放課後のホームルームが終わるとすぐに俺の席に歩美がやってき

た。

「ああ、ちゃんと行くよ。ちょっと待ってる。すぐ支度するから」

「焦らなくても構わないぞ、姫」

大慌てで支度して帰ろうとしても捕まえてきそうな奴が、その隣に悠然と立っていた。

音楽室に向かう途中、ふと忘れていたことに気がついた。

「そついえばさ、文化祭の曲っていつになったら全部決まるんだ？
もう時間も無くなってきたし」

そう、昨今の『ゆとり教育』という馬鹿げた風潮にも負けず、この中学では毎年文化祭が開催される。俺たち吹奏楽部は日頃培った実力を発揮するのに最適なこの機会を逃すわけがないのだが、本番一カ月前に迫った今でも、曲が一曲しか決まっていらないのだ。

「優君…、今日がその会議の日だよ？」

はあと、ため息をつきながら呆れた表情で、歩美は返事をした。

「さつさと決めないと、おっしゃる通り時間が無いですからねえ、
姫様？」

意地の悪い声と表情で、部長がのたまいやがった。どうやら俺だけ完全に会議のことが頭から抜けていたようだ…。

「いやあ、それにしても、昨日はデッカイメス猫に襲われて大変だったよ。まるで豹のようだった」

…その豹を肉体的にも、社会的にも封殺おまえは、国家権力の犬
つてところか。

「ひっ…！ ひ、豹…？ やだ…、そんなのが学校の辺りをうろつ
いてるの…？ 優君怖いよ…」

俺と福島と変態保険医の一件を知る由もない歩美は、何故か日本
には有りもしないはずの名前に萎縮して、小柄な身体をふるふる震
わせて腕にくっついてきた。…おい歩美、いつまで抱きついてるん
だよ。もう音楽室見えてきてるんだぞ、こんなところ誰かに見られ
たら…

「あー！！ アユミンずーるーいー！！ 私も姫ちゃん抱っこする
ー」

「あ、私も私もー！！」
「なにににー？ 今日には姫っち奉仕デー！？ こりゃ乗り遅れちゃ
いけないよー！！」

いい加減あんたたち女子は俺をオモチャ扱いするのを止めること
は出来ないのか！？ しかもスーパ―の特売みたいな名称を付ける
な！

「ふむ、僭越ながら不肖福島、姫さまのご好意に預かり『ごほーし』
されるといたしましょう！」

女子にモミクチャにされる直前に、猫殺し福島の左頬にハイキッ
クをくれてやったが、何故か満面の笑みを浮かべながら倒れていく
様が見られた気がした。まあ、その後はもはや慣れっこになってし
まった全方位圧迫攻撃に為す術無しな状態にされたわけだが。ん、
白？ 今福島の声が聞こえた…よう…な…。

えびそーど7 姫様御拔擢（後半）（前書き）

長くお待たせして、大変申し訳ありませんでした。

えびそーど7 姫様御拔擢（後半）

「第三回文化祭の曲どうしよつか会議をはじめまーす」

軽いな、福島。

隣りでガタガタ震えている歩美を尻目に、猫バスター福島司会を耳にした。てか、いつまでくつついているんだ。

一通りモミクチャにされたあと、満足気な顔をした福島が皆をなだめて、音楽室に集合させた。あれでも一応は吹奏楽部の部長なわけ、女子は渋々といった感じだったが、皆を集めるのにそう時間はかからなかった。そういう統率をとる力があるくせに、なぜ自分の煩惱に打ち勝てない、福島。

「一・二回目で既に決まっている曲は、流行の映画の曲を入れようってことで、『パイレーツ・オブ・カルビ牛』、それにコンクール課題曲の『風邪の舞』が選ばれたわけだが…」

あー、あらずじだけ知ってる。確か、牧場で働く若者がある日牛の呪いにかかって、月の光に当たると牛乳を渴望するようになるってことで、親父さんに追い出されて、全国400ヶ所の焼肉スポットを制覇して呪いを解くために、海に飛び出すんだよな…。今やってるのはその続編だっけ、今度は豚トロの呪いだか何だか…。いや、古いだろ。全然流行じゃない、誰だこの曲を推薦した田舎者は、今流行の映画はなんてったってゲゲの…。それは誰だって演奏したくないか。それに課題曲の『風邪の舞』は、いろんな学校で人気になってる曲なんだよな、他に3曲も別の課題曲があるのに、なぜかこの曲がコンクールの課題曲部門で演奏されやすいようなんだ。

「華がなああああああああああああああああああああああああ
あああああああいつ！！！！」

福島、吼える。

「夏のコンクールにも中途半端な成績しか収められない我々が、全
ての力を出し切って演奏をお客様に届けることができる絶好の機会
である文化祭で！！　なぜ！！　中途半端に古い映画のテーマで茶
を濁すような！！　醜態をさらさなければならんだああああああ
ああああああ！！！！！」

それを言うな、マジでへこむんだよ。ほら見る、歩美が下向いて
ショボーンとしてるじゃないか。去年の夏の失態を思い出しちゃっ
たんじゃないのか。確かに映画の評価についてはそれなりに賛同は
するが、言い過ぎだつて。

「それじゃあ部長、『パイレーツ・オブ・カルビ牛』は無しつてこ
とですか？」

「いや、時間が全くとっていいほど無いからな、演奏はする。た
だしそれをメインに添えるような真似は断じて許せないということ
だ」

女子一年の質問に淀みなく受け答える部長。メインには添えな
い・・・ねえ。

「おい福島、そう言うからには何かとっておきの企画を考えている
んだろうな？」

「ザツツライイトウ！！ その通りだよ姫！ さすが慧眼の持ち主だ！」

意味が同じ言葉を繰り返すな。

「我々が思いがけず手に入れた素晴らしい資質の持ち主、そう！！
姫にこそその答えが隠されている！！」

はいはい姫様をプロデュースしたいのね、勝手にやってくださいよ……。誰だよその姫ってのは……。あれ？

「姫こと、姫宮優をソリストとして仕立てあげ、本当のステージの姫様として活躍してもらうのだ！！」

フルネームで指名が入りました。それも途方もない注文。

「ふ……ふざ……」

あまりの突飛さに声が上手く出ない。ソリストってことはあれだろ……。？ 俺がメロディーを全部やるんだろ？ で、他の人たちは伴奏に徹してサポートに回るって……。そんな横暴な案件が通るわけないだろ。他の3年生が許すわけが、

「さんせーい！！」

「たのしそー！！」

「姫ちゃんのソロライブ……キャー……！ カッコいい可愛
い！！ 略してカワツコイイ！！」

ほぼ満場一致でした。

「どうやら誰も反対意見は無いようだな？」

いやだから本人がイヤだって、

「それじゃあ姫のソロライブにふさわしい、とっておきのナンバー
を選曲してあげようじゃないか皆のものたち！！」

「「オオオオオオオオオ！！！！」」

反対意見は棄却されました、民主主義の化身、多数決の原理はこ
こまで残酷なのか。

えびそーど8 姫様御出掛（前編）（前書き）

最初にこの言葉を言うのがテンプレになってるなあ・・・遅れて
ゴメンナサイ。

えびそーど 8 姫様御出掛（前編）

私の一日は窓を開けることから始まる。

夜更かしをしてしまい、腕を動かすのでさえ億劫であっても、カーテンを開いて朝の陽を一身に受け、窓を開けて部屋の空気を入れ替えれば、たちまち眠気なんて吹っ飛んでしまふ。・・・たまに一過性な場合もあるけど。

単純な一日の始まりの儀式。その中にもし、君がいてくれるなら、それは始めから素晴らしいことが起きるとわかる吉兆になる。今までいつもそう、だから今日君が私の見える場所にいるのも・・・あれ？

「いやあああああ！！！！ 優ちゃん起きてええええ！！！！」

幸せのシンボルは、その艶やかなブロンドの髪を道路上にぶちまけながら、見事にぶっ倒れていた。

「8対2の割合で歩美が悪い」

「もう・・・、だから謝るから許してよ・・・」

金髪碧眼のわがままお姫さまは、上に羽織ったパーカーをピョコピョコさせながら私の隣を歩いていく。

「約束の時間に間に合わないから朝ご飯抜いてまできたってのに、一時間経つても出てこないなんて考えられないぞ普通！」

「だったら・・・チャイムを鳴らせばいいじゃない？」

「それで三三七拍子をやってみた」

・・・夢の中でパパとママを応援してた気がする。パパとママもきつと私を応援していたに違いない、うん。

だけど優君は、ちゃんと朝ご飯を食べなかった過失についてはキチンと責任を認めてるんだ、偉い偉い。

「被害者の頭を撫でるな！」

怒られちゃった。せつかくの優君とのお出かけなのに・・・、幸先悪いなあ。

先週の文化祭の話し合いの結果、「パイレーツ・オブ・カルビ牛」と「風邪の舞」は決定、優君のオンステージでは優君が希望していた「冷静大陸」と、沈没で有名な超大作、「怠惰ニツク」のテーマ曲を演奏することになった。ところが優君、怠惰ニツクを知らないと言った。「飛んでる、わたし飛んでるわ！」と、名シーンのセリフを言ってみても、「クスリでもキメたのか？」と言われてしまう始末。

というわけで、これから橋向このレンタルビデオ屋さんまで行ってDVDを借り、二人で見ようということになったのだ。なんと優君からの誘い！「どれが怠惰ニツクなのかわからないから誰かについてきて欲しいんだけど、福島は考慮に入らない。だから日曜お願いできないか？」と、いかにも消去法チックな理由を説かれたけど、こうして二人で並んでお出かけできるんだから気にしな

い。

こうして近くから改めて優君を眺めみると、全然女の子として努力してないのに、女の子してる。あんなスースーした腰巻きなんてマツピラだ、と言って好んでよく着ているオーバーオール、肩に掛ける部分は腰に垂らして上からパーカーを着る。なんてことない普段着なのに、優君のボーイッシュで爽やかな印象を存在を引き立てるにはそれでも十分役に立ってるんだ。「こっちジロジロ見んなよ」と言いながら耳を赤くしてるのがなんとも可愛らしいよね。

私はというと……。優君の引き立て役でしかないのだろう、商店街に入って人通りが多くなっても、行き交う人々が向ける視線は全部優君の物だ。……。いや、それは当然だろう。一人で歩いていたら、私をジロジロ見てくるわけがない。というかそんなことされたら怖い。でも……。うらやましいという気持ちは変わらない。

「……ん？ どわっ!？」

急に優君が後ろを振り向く。優君はやや早歩きで私のちよつと前を歩くから、私は優君を後ろから抱き支えるような姿勢になっってしまう。

「うわっぶ……。大丈夫？」

「ああ……。今さ、私のこと変な目で見るやついなかったか？」

さつきから羨ましいと思われるほど浴びてるじゃないのさ、今更気付いたの？ この子は……。

「いやそいう意味じゃなくて、もっとこう……。ああなんだ……」

・？　そう、犯罪予備軍的な！」

・・・どうだろう、私からすれば優君の今日の可愛さ愛らしさが犯罪的に見えるよ。みんな優君のこと攫って可愛いお洋服着せて抱きしめてぎゅーってハグしてほっぺムニムニしたいって思ってるんじゃないかな？　私はそうしたい。

「学校と我が家でほぼ毎日されてるから、もう結構だ」

そんなことをしゃべっている内に、橋も越えて商店街のレンタルビデオ屋さんについてしまった。きつと中に入って目的のモノを見つけたらあまった時間で『VUMP OF PORK』とか『たいらのあやや』とかの新曲のCDもチェックして、でも借りずに目的だけ果たしてまっすぐ帰るんだらうなって思ってた。

「よう、姫様に歩美君！！　こんなところで会うなんて奇遇だな！！」

優君の観察力はすごいなって、改めて関心しちゃった。

えびそーど9 姫様御出掛（中編）

まったく、世の中と言う名の虫籠を作りなされた神とやらに唾を吐きかけたいような気分だ。もともと商店街の本屋という憩いの場所は知り合いと遭遇する可能性が高いということはわかったが、だからって天敵と鉢合わせするような出くわし方をさせられるのはご勘弁願いたい。

「いやー、こんな場所で姫様に会えるなんてなんたる偶然！ このような機会を下さった神様には心からお礼をしないとね！ サンキ ユーゴッド！ イッツフライデー！」

それは仕事に疲れたサラリーマンが、週末の金曜日に飲み会で発するべき台詞だ。決して中学生が使える言葉じゃない。

……これは断じて偶然なんかじゃない。きっとこの前の話を盗み聞きして先回りしてたのかもしれない。いやもしかすれば家の前からずっと尾けられていたのか？ とりあえず店の中で叫ぶなストーリー（仮）。

「お探しのDVDは『怠惰ニツク』だろう？ それならあそこの棚にあるから持っていくといい」

そう言いながら指差した区画には、なるほど、旧作洋画のDVDがあいいうえお順にずらりと並んでいた。小ぢんまりとした店の入り口付近は新作のモノが陳列してあって、聞かなきゃわからなかっただろうから素直に助かった。

「行こうぜ歩美、怠惰ニツクを探さなくちゃな」

「…………ふあ！？ まっ待って優くん！」

『隣のトド』や『おどろけ姫』といった例の巨匠映画の区画に足を止めていた歩美は、やや遅れながらついてきた。

ええっと、怠惰ニツク、た…た…た…。あれ？ 無い…。ここじゃないのかな？ 夕行の映画はこの一番下の段なんだが…。俺がしゃがみながら探していると肩を叩かれ、振り向くとヤツのニヤニヤとした顔があつた。まさか……，

「姫、お探しのDVDはこちらではないですか？」

再び指し示す指はなぜか妙に上向きの角度をしており、その場所には探していたパッケージが二つほど陳列されていた。それも丁寧にチ行の映画の左側に。

…ハメられた。こいつ、先回りして一番上の段に置き換えたんだ。試しに自分で取ろうとするが、届かない。上から二段目の段のところにギリギリ指が引つ掛かる程度なのだ。自力では無理に決まっている。

「ありやりや… 優くんにはちょっと届かないみたいだね？ 私が取ってあげ」

「おっと歩美くん危ない！ 床にGの戦隊が！」

ひえええ！ つと恐れおののく歩美。いや、嘘だって気付けよ。

「おい福島、性根の腐った真似してないでさっさとそれ渡せよ」

「これでは姫様がこの『怠惰ニック』を手に入れることが出来ないではないか！ どうしたのか… どうすれば…」

今日はとことん人の話は聞くものと決め込んだらしい。いつもより二割り増しで腹ただしい。

「む！ そうか！ その手があった！ そう、この手が！」

福島の手がワキワキと蠢きだしている。今までの経験上この動きは非常に不味い。DVDなんて知ったことではない、状況が変わった。店の出口は… 良し、誰もいない。今なら余裕で抜けられる。三秒数えたら走るぞ。一、二、さ、

「大変だ歩美君！ 今度はそっちに行つたぞ！」

ひえええ！ つと恐れおののき駆け回る歩美。だから嘘だつて気づけ… あ！？ 出口が塞がれた！ 畜生、これじゃあ最短経路が確保できない。福島め、歩美を誘導しやがった。…だが俺の脚力を舐めるなよ、このナリになってから前と比べてかなりの軽量化が図れたんだ、棚の周りをぐるりと回れば… 行ける。風になれ俺！ 行け！

「さあ姫様どうぞおとりくださいませ！！」

風になる前に見事に防風林に捕まり、両脇を持たれて抱えあげられてしまった。不覚。

「今すぐ離せ」

「それはできません、姫様。『怠惰ニツク』を見捨てるおつもりですか？ さあ早く！」

結局何を言っても、そのパッケージを取れの一点張りになりそうな気がしたので、仕方なく手に取った。男女の顔をバツクに立派な船の写真が写されている。歩美が言っていたのはこれか、「私飛んでる！」って。今の俺も飛んでるよ。参ったかニツク？ 俺は参りました。さあ今すぐ下ろせ福島…。

「それではカウンタまで向かいましょうか、姫様！」

俺を抱き上げたままカウンタまで向かっていく、このストレート変質者め。…仕方がない、これで気が済むなら好きにするがいい、さすがに外に出たら暴れてでも抜け出すがな。ほら店員さん、このDVDを貸してくれ。

「あらお嬢ちゃんこんにちわ！ このDVD一枚でいいのね？ 旧作だから七泊までできるけどどうでしょうか？」

やたらフレンドリーで若い女性店員がいた。いつも来てたけどこの店にこんな人いたっけ？

「えと…、七泊をお願いします」

「七泊ね？ 会員証はお持ちですか？ …はい、350円になりますね！」

350円か…、CD借りるなら一日で120円くらいで済むのに、なんか気分的に損した気分になってしまうな。中学生の財布では100円はかなりの力があるぜ。

「はい、ちようどですね、ありがとうございました、どうぞー」

DVDの入った青い袋を受け取り、レシートをもう片方の手で持つ。…さあさつさとこの店を抜けよう…。ほら福島動け。

「今日はお兄ちゃんとお出かけかな？ 一人で買い物できたね、エライえらい！」

俺たち、端から見たら兄妹らしいよ？ 頭撫でられちゃった。
…あれ？ なんか凄く顔が熱い… 耳の端まで熱いよ？ ……今すぐ下ろしてくれ福島、なんか逃げたい気分なんだ、おい！ 福島、下ろせ、下ろせよー！！

「あは、照れて赤くなっちゃった。本当に可愛いね！」

俺は両手を顔に当ててただ顔を見られないようにしているしかなかった。…両脇から感じる福島の手の感触があまりに不快だったので脇を強く締め付けるが、やつこさんは気にせず、むしろもつとと指が動いていた。

「じゃあね、お姫様！」

直後、自分の口から八行と十行の組み合わせさったなにやら奇妙な発声が出てきたが、そんなことを気にしてられるほど今の俺は心の余裕を持ち合わせていなかった。店員のニコニコとした笑顔が目には焼きついて離れない、嗚呼見ないで…。

えびそーど9 姫様御出掛（中編）（後書き）

またしても更新が途絶え途絶えになって申し訳ありません。たまに
いただく評価やメッセージにはいつも励まされます。今度の更新は
もう少し早くするよう、努力します…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6703a/>

お姫様な俺様

2010年10月9日21時00分発行